

阪神大震災

上塚 弘

地震発生直後

ドォーンと大きな音で、布団からはじき飛ばされて、枕を抱え、胡座をして座り込んだ姿勢になった。ガァーン、ガァン、ダァーン、ダァン、ドォーン、ドォン、形容のし難い音。梁が軋み、砂ぼこりが舞い上がり、本棚がガチャーンと飛んで、筆筒が倒れてきた。「うおっー！なんやー！なんやー！」「裕子！どこやー！うごくな！」「大丈夫！」「ここ。ここよ。」

バリ、バリナー、バァーン、バァン、ヴァァン、ヴァァン、何度も、何度も、叩き付けられる様な衝撃が襲ってくる。長い、長い、とてつもなく長く感じた。必死になって階段を駆け上がる。砂ぼこりの中、抜けた壁が行く手を遮る。やっと2階へ、「さとりーさとりー！」「おばあちゃん！大

丈夫？」大声で叫ぶ。「だいじょうぶ」「だいじょうぶ」「そこにおれよ！動いたらあかんで」

2階の診療所部分の廊下は、倒れかからんとする柱を支える格好にカルテラックが倒れ、その僅かな空間を這って進む。3階に行く階段は、壁が抜け、柱は宙空、踏み板はぶらぶら。夢中で座敷へ飛び込み、4人で手を取り合って「よかった。よかった。」ここで初めて、すこしなま温かい、にゆるーとする血の感触を額に感じる。頭に手をやってみると、指は血のなかに埋まってしまふ。そこへ再び、ドカーン、ドカーンと大きな揺れ、今度はかりはこれで死んでしまふかと、恐ろしい、身ぶるいがしてきた。とどめもなく涙が出てきた。母、親子と4人揃っているのがよかったと心底思った。外から「助けてー、助けてー、」悲鳴が聞こえる。

5分も経った頃であろうか、やっと闇から目が馴れたのか、すこし部屋の様子が判ってきた。とにかく、外へ出なければと、今度は3階から1階へ、おそる、おそる階段を降り、庭に出る。サッ

シの雨戸、厚いガラス戸はふつ飛んでいて難なく出れた。

国道に出てみる、隣の齒科医院は3階、2階がおし潰されて歩道に飛び出している。北側の見慣れた家はと悉く潰れて、全く夢を見ているような、信じられない光景。直ぐにひつかえすと、隣の奥さんが庭先に、「上を見てきます」「ありません！」「へえー」と絶句。再び国道へ、車が2、3台衝突している他、走る車の姿が無く、不気味な静けさ。なにか一人だけ、別の世界にはうりこまれた様な錯覚さえ覚える静寂。業平橋に行つてみると、西のほうから太い、高い黒炎が揚がつている。火事が来たらどこへと、今度は東の本通り商店街のほうへ走つてみると、無い、無い、家がぜんぶ無い。どこへ逃げたら良いのかと、全く混乱して国道を何回も走り回った。

どうやら黒炎は、こちらのほうまで襲つてくる様子が無いことを確かめ家の方へ、近所の内科医の先生とばったり出会う。「大丈夫ですか？」「えらいこっちゃ！」と大声を掛け合い「近所、見て

きます」と別れ、今度は息子の学と共に近所を一軒ずつ声を掛け、無事を確かめながら、南の方へ様子を見に行く。

友人の被災

何か虫が知らせたのであろうか、とにかく南の方へ、南の方へと進んでいった。倒れている家を縫う様に駆け抜け、押し潰された二階の屋根を駆け上がり、倒れた塀を踏み越えて、電柱を跨ぎ、友人の屋敷へ。

大きな門がどかっ！と倒れている。庭に入り、築山、池と飛び越えて母屋の辺りに行くと奥さんが果然とつつ立ち「長男、主人があそこ。あそこ」と呻く様に指差している。大きな、二階建ての母屋は、全くぺつちゃんこ、巨大な材木はまるでマツチの軸が無造作に折り捨て、束ねられたように重なりあっている。次男と親戚の人がとりつかれたように、瓦を投げ、角材を押し挙げている。溢れ出る涙で、ぼんやりとしか映らないがまるでスローモーションの映画を見ているよう、一瞬立ち

疎むが、友の名前を呼んで夢中で駆け上がる。太い梁は、数人の男の力を合わせてもビクツとも動かない。「さとり！鉄の棒や！」「鋸も持つてこい！」駆け去ったかと思うと、何処から見付けたのかすぐにボール、鋸を持つてくる。

30分もした頃であらうか、頭髮が見えた。もう少し頑張れ、頑張れと必死で梁、柱を動かす。やっと現れた長男君は、残念乍すで亡くなっていた。脈も触れず、胸を開いて心音を聞いても聞こえず、瞳孔は開き、瞬目反射にも反応せず心マツサージをしても反応は無かった。「上塚さん、なんとかして」「伊藤病院へ運んでみる」戸板に載せたり、おぶったりして、通り会わせた車に押し込むようにして伊藤病院へ担ぎ込んだ。

小学校以来の友人・それもとびつきの友、中学、高校と何時も一緒に過ごし、彼が留学した期間を除けば、三日に開けずに会っていた友が……。なにかこのとき、譬えような怒りがこみ揚げてきた。彼が小生の魂に「頑張つてや！」と大声で激怒したに違いない。怒り、激情、くつ

そ！やつたる！なんとも言えない感情が湧き揚がって来た。

伊藤病院の修羅場

7時前でしようか伊藤病院に到着しました。この病院は、当市で唯一の私立救急告知病院です（ベッド数90床）驚きました。受け付けのロビーにはもう既に10人程の人が長椅子に寝ており、地べたにも数人が横たわっていました。外科外来に行くと、床は血糊と泥、散乱するアンプル、注射器、ガーゼ、その間を埋める様に何人かが横たわったり、踞っていました。上辻院長は膝を折り処置したかとおもうと、つぎは向こうの処置台に駆け付けます。あまりの酷い光景に、声も出ません。「手伝うわ」と言うてはみたものの、ゴム手袋を着け、ガーゼでの圧迫止血、傷口のテープ固定をするだけ。上辻院長はてきばきとステイブラーで縫合。その間も続々と押しかける負傷者で廊下も溢れ出し、玄関入り口に入らず、歩道にも踞っています。一見して亡くなっておられる、DOA

の人も次々と運び込まれてきます。やがて医師会員の先生も御自分の診療所から沢山のガーゼ、薬等を持参してこられました。

白衣の効用

「会長先生の所へ行ってくるわ」と伊藤病院から通りがかった単車に乗せて貰ったのは8時30分頃でしたでしょうか。伊藤病院で借りた白衣を着ていた小生を「先生でっか、乗りなはれ」と乗せて頂きました。この白衣というものは、誠に絶大な効果がありました。トレーナーに、ズボン姿では誰も医者やとは見てくれません。後に述べますように、この大混乱期においては医者として認識してもらうには、白衣しか無かったようです。初めて会った人に頼む時も、避難所に巡回する時でも、白衣を着ているから相手は医者と認めたり、安心もするわけです。後に開設しました市庁舎の医師控え室には、芦屋病院と伊藤病院からどっさり白衣を借りて置いておきました。

市庁舎の対策本部

会長の所にやっと辿りついたら、そこも廊下に数人が横たわっておりました。奥さんが「主人は市役所です」と叫ぶように言われる。「伊藤病院か芦屋病院に行けるように救急車の手配をします」と後髪の引かれる思いで医院をあとにしました。南の方に進もうとしても、道路は倒れた家で埋め尽くされ通行出来ず、止むなく深江の方を迂回して、市庁舎に行きました。途中の惨状たるや、今思い出してもぞーっとする有様でした。助けて、助けてーの悲鳴、家の中を進んでいるような道路、狂ったように駆け出す人横たわったり、踞っている人、運転をして貰っている人が、何度も何度も嘔吐し、「地獄や、地獄や」と叫びます。とどめもなく出てくる涙、涙のなかで「頑張つて。頑張つて」と背中を擦るだけ。市庁舎で會長と逢い、伊藤病院とここまで見た惨状を報告、「とにかく頑張るように良く伝えてください。君は、人出があれば直ぐにここへ帰ってください。」

伊藤病院は続々と負傷者が担ぎ込まれて、足の踏み場も無い状態。待合ロビー、内科外来、外科処置室、廊下、玄関風除室、リハビリ室など凡そ50人程が、長椅子に横たわったり、そのまま地べたに寝ている。相変わらず、上辻院長は黙々と縫合処置、スタッフも揃い、顔見知りの看護婦さん、事務職員さんも一生懸命動いている。全員黙々と、手際よく、なにかとりつかれたように働いていた。気管内送管の処置も何人かは受けている。停電のためカウンター・ショックは出来ない挫傷、裂傷の縫合を暫く手伝っていますと、「亡くなった人は奥のリハビリへ運んでください」リハビリ室は直ぐに埋め尽くされてしまいました。どの遺体も、眼結膜に真っ赤な出血があり、打撲圧迫部は白色その周辺は皮下出血斑、頸静脈の怒張、顔面の浮腫など圧死を伺わせるものであった。上辻院長より「遺体を安置する所をなんとかしてよ」の依頼。「よっしゃ、消防へいつてくるわ」と前述した単車に乗せて貰い再び市庁舎へ。広い庁議室は、大きな楕円形のテーブルがあ

り、市長、助役を囲むようにそれぞれの部署の人が座り、ものものしい、ぴーんと張り詰めた重苦しい雰囲気であった。医師会のブースは一番窓際の4席、隣はコンピューターと警察関係。非常に連絡のスムーズに行く場所であった。電話が少なく、奪い合うように使うがせつかく空いた電話を掛けようとしても通じない。芦屋病院とは内線が一本だけ繋がる。電話のそばから離れないように依頼する。神戸は芦屋よりひどい、兵庫医大も大きなダメージを受けている。芦屋病院や伊藤病院からの2次転送はどうしたものか……会長と交代で、県庁初めいろんな所に連絡を試みられるが、悉く不通。その間も、絶え間無くなる甲高いサイレン、届く情報は全くひどいものばかり。「青少年センターは無理です!」「避難所は!」「だめです。連絡がつかません!」どこそこもやられた、あそこも、ここも、これまでは個人の死というレベルでの情感しかなかったが、なにかもつと大きなもの、想像もつかないことが起こりつつあるという恐怖感が出てきた。都市が、否もつと広大な

物が壊滅しかかる時はこんな時かな、なにか映画のセットにいるような錯覚さえ覚える異様な雰囲気、早くこの場から逃れたい！最後には家族に逢いたいなあとの思いが去来してくる。市長と目が合つて、軽く会釈すると何か語りかけたような表情。すうーと横へ行つてみると「芦屋は火事が起こっていませんよねえ」と呟くように、言われたことが非常に印象に残つた。

見付けたぞ！ 救急車！

昼過ぎであつたらうか、消防本部の前で、偶然にも一台の救急車を見付けた。「大阪市」と書いてある！ドアを叩いて、窓を開けてもらった。頭には包帯を巻き、血と泥で汚れた白衣姿を見て、びっくりしたのであろう。「大阪から来たんか？大阪は大丈夫か？」「揺れましたけど、ビルも倒れてません、火事ありません！」「43はなんとか通れます」しめた！と思ひました。この車で2次のルートが確保出来ると。この車を離れたらあかん！なんとしても乗り込んで、大阪まで行く。

芦屋まで連れて帰つてもらう。また大阪まで行く！アイディアが閃いて来ましたが、巧くこのことを伝えねばならない。こちらからばんーばんーと高飛車に言つて、断られたら不味いと咄嗟に思い消防署の方で話を聞いて貰おうと、署長さんの所へ一緒に行きました。まず芦屋署の了解を取り、芦屋病院への連絡をし、救急車に乗り込みました。先方は芦屋病院までのつもりだったのでしよう。「出来るだけ、詰め込んで運びます」と言うのと、予め選択されていた小児2名、大人1名がストレッチャーで運ばれてきました。子供さんの親父さんには「私が一緒に連れていきます。必ず帰ってきますから」と説得しました。子供は互い違いに寝かせて、病院のストレッチャーごと入れ、しっかりと固定。ここで「ぼくも一緒にいくわ」と言い、寝台の横でしゃがみこみました。隊長は少し驚いたようでしたが、3人が前の座席に乗ることで解決。病院を出てすぐに大きな段差、ガーンと来ると、庇う間もなく子供2人は飛び上がります。「大丈夫でつか？」心配そうに窓越しに声

を掛けてくれます。「大丈夫や。ところで何処へ行くねん」えらいことを聞き忘れていました。「総合医療センターです！都島です。」JR環状線から見える大きなビルやと気が付き、あーよかったと思いました。43号線は、段差なんてものもなく、コンクリートの一枚の大きな道床が、そのままめくれあがったり、阪神高速の橋げたが落下して通れない所が沢山ありました。救急車は巧みに車の間をすり抜けて進みますが、もどかしいのでしよう「救急車侵入！救急車が入ります！」とサイレンのポリウムを上げたり、マイクでがなりたてます。

2人の子供は、比較的落ち着いており、けなげにもじーっと眼を閉じていました。救急車に同乗した目的はもう二つありました。搬送中若しも患者に急変があっても、少しは役に立つのではないか。医師としての眼から見た惨状を出来るかぎり伝えて、少しでも助けていただきたい。前者は何とか無事終えそうであるが、後者の場合は正確にといったも小生の医学の知識なんて限られたも

の。うまく伝えねば芦屋が見殺しにされ、大変なことになる。芦屋から医師として初めて乗り込むんや！この時ほど日頃の勉強不足を恨んだことはなかった。あれも言わねば、これも頼まねばと考えあぐねているうちに、救急入り口に着いた。

総合医療センター

「芦屋から来ました！芦屋は大変です。DOAも続々と増え、重症者は廊下やロビーに溢れています。芦屋を助けてください！」大声で叫ぶようにいつきに挨拶をした。月岡部長が「とにかく淀川を越えてください。なんとか出来ます。こちらからも消防に、もつと応援を出すように言っておきます。」これを聞いたときは、ほんとうに嬉しかった。涙が滲んできて、その場にへたへたと座り込んでしまった。芦屋市からの要請”という話が月岡部長と隊長の会話で出てきた。「この車が芦屋に戻ったとき、市長にその旨を伝えなさい」と助言していただきました。取り敢えず必要と思われるものと、医薬品をダンボールに詰め

て戴いた。

帰路の救急車は飛ばしに、飛ばしました。ある信号区間は反対車線を逆走したりして。二回目の搬送をした時、「うちのドクターを連れて行ってください。彼らも勉強です」有難い申し出があった。三回目の搬送からは三台の車が動員された。医療センター、大阪市大の先生が大阪から救急車に同乗し、芦屋病院でトリアージを行いそれぞれの病院に連れて帰る方法が出来た。より早期に一人でも多くの患者の搬送と一台の車に二人を詰め込んで運んだ。

センターに救急車が到着するや、患者をすうーと引き出し、詰めるだけの医薬品を積み、待つてましたとばかり「今度は僕が行きます」と乗り込んでくれる若いドクターの姿には頭の下がる思いで、只た「ありがとう、ありがとう」と感謝するだけであった。大阪からの帰りは、ダンボール、酸素ボンベを満載、やむ無く備え付けのベッドの下に潜り込むといった具合であった。何回目かの搬送であつたらうか、夜の白み始めた頃、芦

屋の方へ向かっている車中、夙川の辺りを通過した。ああ、やっと一日が過ぎたんかと思うと、何か無性に腹だたしい思いがした。

初めての電話

18日の午前7時頃であつた。昨昼から何回も来た総合医療センターの救急部門の受け付け室に初めて入った。震災以来初めて電話をするためであつた。芦屋の電話が不通であることは先に述べた。家人は市庁舎に無事非難していることは、昨夜9時頃搬送の途中で立ち寄った消防署の前で、私を捜して待っていた息子と逢つて確かめていた。以後市庁舎に立ち寄る機会を見付けては一言、二言声を掛けた。我々が無事であることは誰にも知らせていない！大阪であれば電話が通じることは判っていたが、あの混線を思うと自分だけ電話を使おうという気にはなれなかつたし、またそのような時間もなかつた。妹のところに電話をして、親戚、知人への連絡を依頼した。

どうしても話したい先生がいました。わが恩

師、前大阪労災病院耳鼻咽喉科部長伊藤 弘先生です。「どうしてた？無事やったか？今まで起きてたよ」「救急車に乗っていました。先生に教えて貰ったとうりに」嗚咽されました。

有り難い励まし

芦屋市は、西宮市と神戸市に挟まれた、東西2・5 km、南北8・5 kmの小さな地域に86、805人が住んでいるベッドタウンです。

1月17日未明のM7・2の大地震は、このちっぽけな町にも容赦無く襲いかかり、未曾有の災害をもたらしました。死者397名、負傷者は3、195名にもものぼっています。縁あって小院でお会いたした70名以上の患者さんもこの犠牲になられました。住居と一緒にになっていた診療所は、15年前改築したときの鉄枠を残して、木造の建物は全壊してしまいました。幸い家族全員が怪我もなく逃げる事が出来たのは、開院以来整理していた2万5千枚のカルテのお陰かと思っています。

震災以来、参九会の先生方には、有り難い、誠に有り難い励ましや心遣いのお手紙や電話を頂きました。泣きだすだけで、言葉が続かないことも……どのようにお礼申し上げたらいいのか、言葉が見当たりません。